慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中世トルコにおける宗教舞踊 : The Whirling Dance と歴史的・宗教的背景
Sub Title	Religious dances in Turkey in the middle ages : the whirling dance and historical and religious background
Author	本間, 周子(Honma, Shuko)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1977
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.17, No.1 (1977. 12) ,p.19- 28
JaLC DOI	
Abstract	.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00170001-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中世トルコにおける宗教舞踊

——The Whirling Dance と歴史的・宗教的背景——

本　間　周　子*

1. は　じ　め
2. 歴史的および宗教的背景
3. Whirling Dervishes の儀式・セマ
4. む　す　び

1. は　じ　め

古来，宗教と舞踊との関係は，人びとの生活の中においていかに密接に結びつき，互いに影響を与えあっていたかは，種々の文献からも明らかである。特に農耕・狩猟時代の生活は宗教を切り離しては考えられない。[(1)] また舞踊そのものも，その存在価値を宗教の発展過程と共にしてきたものである。

メヴラーナ・ジェラルウッディン・ルーミー（Mevlana Jalalu 'ddin Rumi）

本稿では，時代を13世紀セルジュク朝末期において，イスラーム（Islam）神秘主義，タサッウフ（Tasawwuf）あるいはスーフィー（Sufi）の流れをくむ霊的な指導者であるメウラーナ・ジェラルウッディン・ルーミー[(2)]（Mevlana Jalalu'ddin Rumi, A.D. 1207～1273）と，彼を師と仰ぐ修道士[(3)]らによって行われる宗教的儀式である名高い「踊る修道士」Whirling Dervishes および「旋回舞踊（セマ）」Sema（whirling dance）について舞踊と宗教との関連について考察を加える。

注　(1)　小林信次「舞踊史」（昭和45年）逍遙書院，27

* 慶應義塾大学体育研究所助教授

～28頁。

邦　正美「舞踊の文化史」(昭和43年) 岩波新書，22～23頁。

(2) メウラーナ・ジェラルウッディン・ルーミー，バルフに生れる。神秘主義の最高詩人と仰がれる。メウラーナは我等の主人の意，ルームは小アジアの意。流浪の修道士シャムスとの邂逅が後の whirling dance を形成する契機となった。

(3) 修道士 (Dervish)。回教の厳格苦行派 (スーフィー) の修道僧，托鉢僧。その修道法によって dancing dervishes, hourling dervishes などの派がある。houri はマホメット教の極楽で信仰厚い教徒に与えられる女，天女。

2. 歴史的および宗教的背景

イスラーム文化史上注目すべき「踊る修道士」(Whirling Dervishes) について，それをはぐくんだ歴史的，宗教的背景について述べることとする。

モンゴル族による征服以後の西アジアにおいて，彼ら支配者たちは土着民の文学や宗教にはなはだ寛容であった。彼らは自分たちの信仰を異民族に強制せず，彼ら自身の利害関係からそれらの発展にも積極的に援助し，保護さえも惜しまなかったといわれている。(4)

文化の破壊期と考えられやすいモンゴル族支配の時代に，この地に文化の隆昌を見たことは注目に値すべきである。当代の詩人サーディー (Sādī, 1942没), ハーフィーズ (Hāfīz, 1389没), ジャーミー (Jāmī, 1492 没) らと共にこの時代に生きたルーミーは，詩人・音楽家としてもイラン文化の重要な一翼をになったのである。きたるべきトルコ文化の発達においても，これらのイラン文化を継承し，影響をうけるところが大であったと考えられる。(5)

モンゴル族は本来，彼らと同様の遊牧民であるトルコ民族と大した摩擦を生ずることなく彼らを世界征服の最も有力な協力者として認めたと思われる。また「トルコ民族も異教徒の輝かしい勝利を彼ら自身のもの」としてみずからの文化を創造すべく，意欲的な民族活動を通してイスラームの歴史に新時代を画したのである。(6)

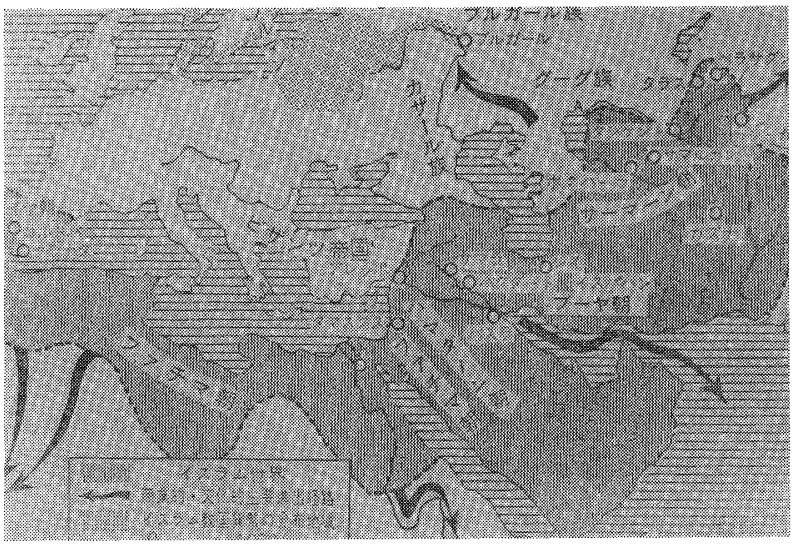
当時の西アジアは，いわゆるイスラームの時代にあたる。最後の予言者マホメット (Mahomet) によって創立された世界三大宗教の一つといわれるイスラーム教を人々の生活の基盤とした時代である。(7)

イスラーム的神秘主義スーフィーは，メブラーナ・ジェラルウッディン・ルーミーや，彼を信奉する修道士ら (Dervishes) と関係が深いものである。

イスラーム教の宗教思想を基盤として形成された諸文化は，東方の文化を西方に伝えるという文化史上重大な役割を果たすことになるのである。

アラビア半島を出発したイスラームは小アジア半島から東ヨーロッパのバルカン半島の国々をはじめとして，文化的・社会的環境を異にするさまざまの民族をも包含して黒海・カスピ海

中世イスラーム世界（10世紀ごろ）〔西アジア・インド史（京大東洋史V）〕



周辺の，トルコを含む国々にも及んだのである。

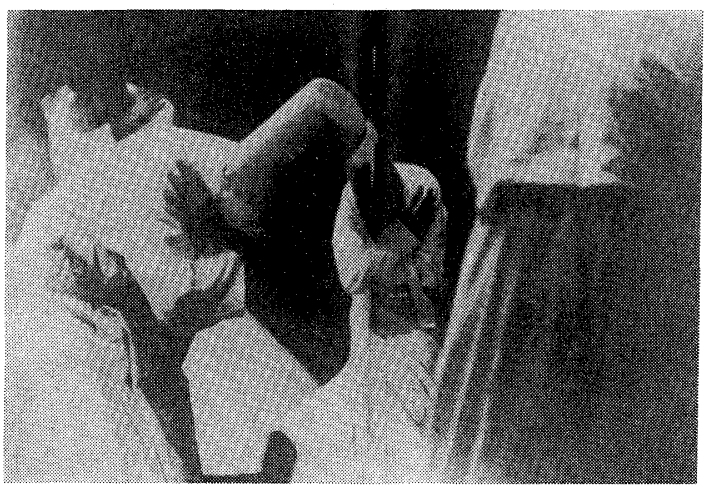
一方エジプトに入った流れは地中海沿岸に沿ってさらに西に向い，北アフリカ一帯を経てモロッコへと延びて大西洋岸に達したのである。また北に進んだイスラームは，ヨーロッパ大陸のイベリア半島に渡り8世紀中葉から700年以上もの間この地を支配してきたのである。今日スペインでわれわれの見る華麗なアルハンブラ宮殿の美などは驚嘆に値するものであるが，その絶大な力を残している証しといえよう。

踊る修道士（手前は楽士）

イスラーム教（Islam）は唯一絶対の至上神アッラー（Allāh）を信仰の対象とするものであり，偶像崇拝や多神教を徹底的に排除し，神の前における人間の平等を説くものである。その聖典はコーラン（Koran <Kur'ān）として知られている。教祖マホメットが神から啓示をうけ，「読誦されるべきもの」との意であるコーラン(8)は，その一言一句が神の言葉としてイスラーム教徒の一切の生活を規定する力をもっていると思われる。

これは中世ヨーロッパの人々の生活が，キリスト教の支配下にあって，厳格な，戒律的な生活を送ったことと同じ意味をもつものであり，その教えである「信」(9)（imán）と「行」（'Ibádát）もまた生活上の宗教的実践として踏襲したこと

Whirling Dervishes の儀式における礼拝



は言うまでもない。

実践の宗教としての特徴であるイスラーム教の「六信」に対する「五行」は，信仰の告白・礼拝・断食・喜捨・巡礼からなる。この中での礼拝における儀式が Whirling Dance (Sema) を形成する重要な宗教的儀礼の基盤をなしたものであろう。

礼拝はアッラーに対する人々の素朴な願いでもあり，古代の人びとが神と人との中だちとしてその願いを神に伝えたのである。[10] また神託を人びとに告げる唯一の方法として，礼拝に際して舞踊がしばしば用いられた事実があったと思われるのである。

ルーミーによって，メウレウィのデルビッシュ，すなわち神秘主義修道士の本山が創始され，ルーミーが神秘主義（スーフィー）の至聖といわれたことはイスラーム史上見落してはならない重要なことである。

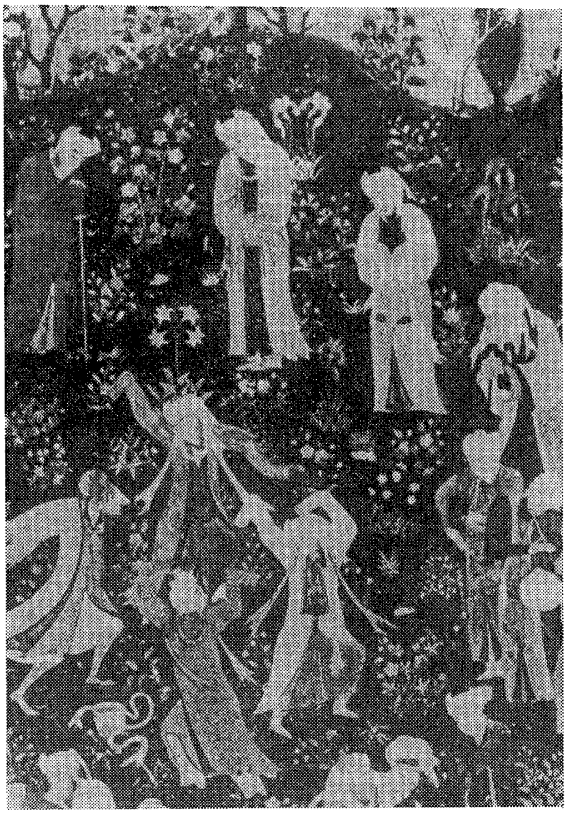
ルーミーの神秘主義は，人間個人が内的に神に帰一することによって「真の存在」すなわち神に還るものであり，自我を滅却して神の世界にとけこむことを念ずるのである。

ルーミーはこの「自我を滅却する恍惚，幻夢の法悦三昧の境地」[11] を彼自身の肉体的，律動的旋舞によって求めたと思われるのである。

スーフィーの至聖ルーミーと後の世の人びとに尊称された彼の教義は，人間の精神は唯一神，アッラーから分離したものゆえ，両者の再合一こそ望ましいものであると説いたものである。この教義のもとに首都コニヤ (Konya)[12] に彼の神秘主義修道士の本山が創建されたのである。ルーミーにおけるイスラーム的神秘主義思想は，8世紀から9世紀にかけて著しく発達した。この神秘主義スーフィーと呼ばれるアラビア語は，スーフ (Sūf) すなわち羊毛の語から派生したもので，もともと「染めない羊毛の粗衣をまとったもの」[13] を意味する言葉であったといわれている。羊は遊牧民である中近東の人びとの生活にはきわめて密接な関係にあったものである。

神秘主義修道士（Whirling Dervishes）によって長い間継承されてきた代表的なセマ（Sema）Whirling Dance は，ルーミーを敬慕してきた人びとによって毎年トルコのコニヤにおいて，古式にのっとって行われるものである。それは宗教的なよろこびの表現であり，神の神秘にふれた状態をあらわすものであるとして今日に伝承されている。(14)

セ　マ（Sema）



注 (4) 中原与茂九郎・羽田明 田村実造・佐藤圭四郎「西アジア・インド史」（昭和51年）創元社，94頁。
(5) 前掲(4)書，95頁。
(6) 前掲(4)著，95頁。
(7) 蒲生礼一「イスラーム」岩波新書，10頁。
(8) 読誦さるべきもの。コーランはイスラム教徒の日常によく読唱される外，各種の儀式において，正規の読唱者が声高く読唱する。
(9) 信（Ímán）。イスラームの教えの一つである信は次の6つから成りたっている。神アッラー，天使，経典，預言者，来世，天命。
(10) 邦　正美「舞踊の文化史」（昭和43年）岩波新書，24頁。
(11) 法悦三昧の境地。Ira Friedlander「*The Wirling Dervishes*」(1975), p. 56, Collier Books, New York.
(12) コニヤ（古都）。トルコ中西部に位置しアンカラ南方240m，聖なる都会として知られ，最も古くから人々が住みついた町。フィルキヤ人の伝説によれば，ノアの伝説に最初にあらわれた場所といわれる。19世紀に衰微するまでの間，セルジュク朝，十字軍，オスマン・トルコなどの勢力下にあって遺跡も多い。
(13) スーフ，井筒俊彦「イスラーム思想史」（昭和50年）岩波書店，147頁。
(14) 前掲(11)書，87頁。

3. Whirling Dervishes の儀式・セマ

- 修道士たちはダンス・ホールに入る前にイスラーム信仰の沐浴を行ない，修道会のコスチュームを着る。
- 服装としては，帽子（SIKKE）は丈が高く蜂蜜色をしたフエルト製で，人間の墓石を表している。
- 長い白いスカート（Tennure）は経かたびらを表し，長い大きな袖のある黒のマント（Khirga）は墓を象徴する。
- マントの下に着る白の上衣の右端はベルトの下にはさみこみ，左側はあいたままである。
- ウエストには，幅は指4本分，長さ2.5フィートの黒のベルトをまく。
- 足には足首までの柔らかい皮の靴をはく。
- 準備のすんだ修道士たちは，ダンス・マスターに連れられて踊る場所（Sema hane）に入場し，静かに一礼し，ホールの片端に並ぶ。
- 修道会の院長（Sheikh）の位置に立つ一番近いダンス・マスターは白の帽子をかぶる。
- 院長は太陽を象徴する赤く染めた羊の皮の場所にゆく。
- 楽士たちは葦笛（ney），ドラムを用いる。
- ハフィーズ（Hafiz：役職を示す名前）は，コーランを全部暗記しており，彼がルーミーの祈りを捧げ，コーランの或る1章をとなえることによって儀式が始まる。

旋回する修道士

セマの楽士，葦笛とドラム

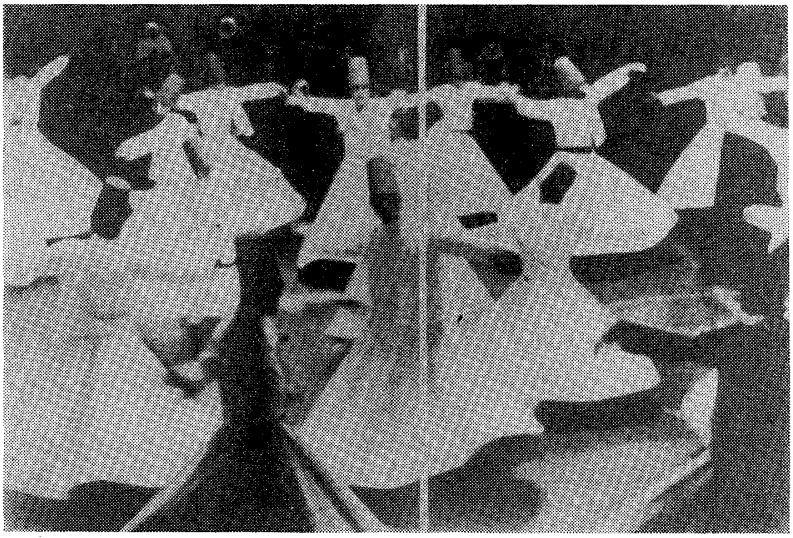
天地を指さす修道士

- 葦笛のプレリュードをきき，ひざまづいていた修道士たちは両手で床をたたく。
- 院長を先頭にして全員が踊り場をゆっくり3回まわり，次におじぎをする時，互いに向かい合った人の眉の間をみつめてその人の心の中に表われた神を冥想する。これをムカベレ（Mukabele）とよんでいる。
- それぞれの位置にくると一斉にマントをぬぎ，それにキスをし床に落す。

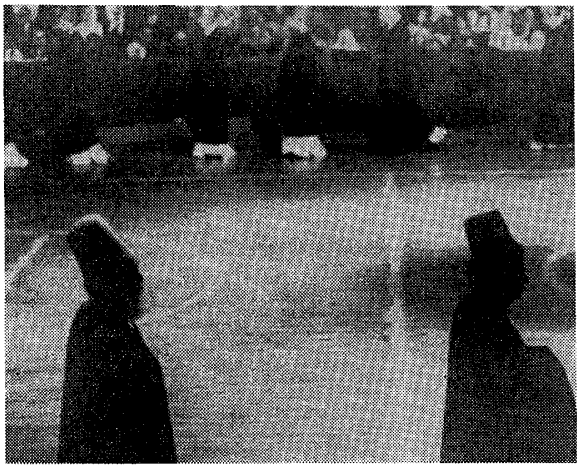
彼等は自分たちと現世とのつながりを絶って，神の世界に入る準備をすることになる。

- 院長とダンス・マスターはマントをつけたままである。
- 音楽士が演奏を始めると，修道士たちは右手を左肩に，左手を右肩において，ゆっくり歩き始め，ダンス・マスターは院長の前にくると左足の上に右足をかぶせた姿勢でおじぎを行い，院長の手にキスをして後ずさりする。
- 修道士たちが院長に近づいて，ダンス・マスターと同じ動作をすると，院長は彼の帽子にキスをする。
- 白い靴をはいたダンス・マスターの足が黒いマントの外に出たときが，踊りに入る合図である。
- 修道士たちはコーランのコーラスと音楽に合わせて旋回を始める。両腕をひろげ，右手のひらを上に，左手のひらを下に向けてくるくる回る。

踊る修道士



セマの儀式



この姿勢は，天からのエネルギーが右手のひらに入り，肉体を通りぬけて左手の手のひらを通して地面に伝わることを意味する。修道士たちは両腕をひろげて神を抱擁するのである。

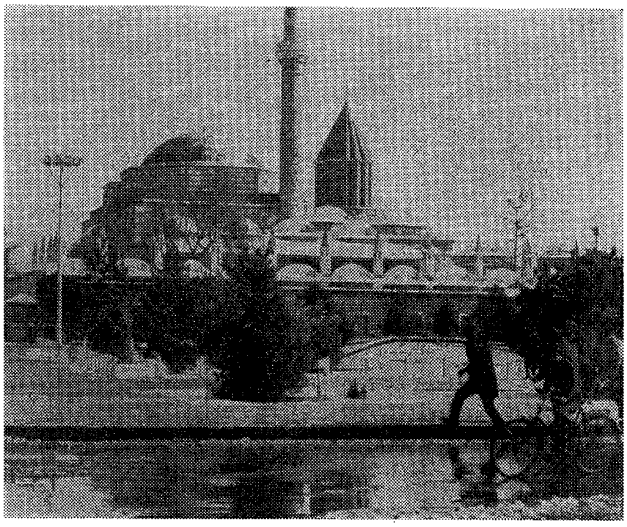
- 修道士たちが旋回をしている間に，ダンス・マスターは彼らの間をゆっくり歩きまわり，目で合図したり，彼らのスピードや，踊りの姿勢を正す。
- 院長は自分の定められた位置に立ったままでいる。
- 彼らは時計と反対まわりで旋回を行い，耳にきこえないほどの声でアッラー，アッラーととなえる。
- 10分位旋回がつづいて音楽は止み，その動作もストップする。この時彼らの長いスカートは体にまきつくのである。
- この旋回は4回くり返されるが，疲れきった修道士のある者は踊りから抜けてわきに立つ。
- 院長がセマに加わるのは最後の，4回目である。

この踊りは宇宙を象徴しており，ルーミーは太陽であり，修道士たちは太陽系の遊星を象徴しているのである。

- 院長は，自分の位置にもどり，おじぎの後，坐って床にキスをする。
- 他の修道士たちも坐り，彼らのマントが4回目に回らなかった人たちによって着せられる。
- 院長がコーランの第一章を口誦すると，修道士たちは床にキスをして立上る。
- 院長はルーミーに祈りを捧げた後，「フ」“hu” という声をだし，他の修道士もこれにならう。“hu” の発声には神のすべての名前がここにこめられているのである。

一同，院長を先頭に退場する。(15)

ルーミーの墓，ミュージアム



この修道会は今世紀はじめ，ケマル・

アタチュルク（Atatürk）（Mustafa Kemal, 1881～1938）の革命によって禁止されたのである。メウレウィ修道会のセマとして他に類をみることのない独自のスタイルを築きあげたこの修道会に，1925年アタチュルクの法律は，一切の行事を禁止する旨を宣告したのである。このことは，修道士（Whirling Dervishes）にとって致命的な問題であった。

禁止理由は

1. トルコは近代国家であり，近代社会において Sema を含むこの宗教的魔術を行っている余裕はない。
2. 修道士らは坐して祈りを捧げるのみである。
3. 納税をしない。
4. 軍務に服さない。
5. 宗教と政治を分離する必要がある。
6. 信仰の自由は認めるが，集団として，また宗教組織として行うことを禁ずる。しかし個人的な宗教行為は除外する。(16)

この発令によって修道会としての存在は廃止されたのである。しかし人びとのルーミーに対する尊敬と思慕はやみがたく，ルーミーの墓をミュージアムにすることによってその願いは達せられたのである。

この Whirling Dance は，1953年コニヤにおいて小規模ながら再開され，以来毎年12月17日ルーミーが神と合体したことを記念してこのセマの儀式が行われ，毎年多数の人々が見物に集ってくるのである。

注 (15) 前掲(11)書，85頁。
(16) 禁止事項——修道士の行事，修道会の集会，ルーミーの墓参りへの義務，シェイフ（院長）の務め（リーダーとして）廃止，修道会への入会。

4. むすび

Whirling Dance（旋回舞踊）の思想的基盤は，後年スーフィーの至聖といわれたメウラーナ・ジェラルウッディン・ルーミーの思想であり，これを支えているものは概括的には神秘主義であるといえる。超俗的な宗教的神秘主義も，遊牧民としての厳しい人々の生活を背景として生まれてきているように考えられる。

ルーミーの教義によれば，前述のごとく人間の精神はアッラーから分離したものであり，そのために人間と神とが再び合一することが必要であるとして Whirling Dance によって律動

的に旋舞し，コマのように旋回しながら神人一体の境地へ参入することを試みるのである。セマの動きの特色の一つとしてはきわめて単純化されていることが指摘できる。

「踊る」というにはあまりにも単純な旋回する動きを通して，神の世界に入ろうとする人びとの心をあらわしていると考えられるのである。この Whirling Dance は，より宗教的であるが故に他の舞踊に比べて単純化され，ひたすら神の世界に入ろうとして単純な動きのリフレーンが主体となっているように思われる。

次に舞踊の概念からみたセマ（Sema）の性格は，どのようにとらえられるのであろうか。

世俗的な悩みや，迷いの中に道を求める民衆が，人間の精神を肉体という牢獄から解放し，法悦三昧の宗教的境地に入ろうとしてセマを行ったことから考えると，いわゆる舞踊の概念に含めるにはあまりにも宗教的であり，肉体否定の舞踊観がみられるのである。これは，中世ヨーロッパにおける宗教思想に通うものがあり，人間肯定の舞踊としての本来性からみた場合，特殊な系譜に属するものといえよう。

参考文献

Ira Friedlander, *The Whirling Dervishes,* 1975, Collier Books, New York.

井筒俊彦『イスラーム思想史』岩波書店，昭和50年。

蒲生礼一『イスラーム（回教）』岩波新書，昭和51年。

中原與茂九郎・羽田明・田村実造・佐藤圭四郎『西アジア・インド史』創元社，昭和51年。

三橋冨治男『トルコの歴史』紀伊国屋新書，昭和46年。

ロベール・マントラン 小山皓一郎訳『トルコ史』白水社，昭和50年。